

令和２年度地域価値創造研究教育推進プログラム（地域実践型教育活動（地域連携授業））審査結果一覧

No.	部局名	代表者氏名	授業名称	サブタイトル	事業概要
1	地域学部	村田周祐	基礎ゼミ	自然の「過少利用問題」解決を目指す地域共創実学教育	本授業は、昨年度のPBL採択事業の続編である。 昨年度より、鳥取県東部を舞台に、地域と鳥取大生の協働によって、アンダーユースとなった海・山・野の再資源化を目指している。具体的には、鳥取県東部の「耕作放棄農地」「間伐遅れの林地」「放棄漁場」を再び糧とする営みに、地域学部地域創造コース「基礎ゼミ（1回生）」、および2～4回生の希望者らが、身体を伴って参画する。さらに、現場と共に悩んで問題解決の道を模索するためのワークショップを実施する。 本授業の特徴は、第一産業の多様なアクター（農業・林業・水産業のすべて）との協働、学部を超えた授業形態にある。アンダーユースという地域課題の最前線で模索する人々との身体ベースの協働によって、学内とは異なる「学びの場」を創出していく。
2	医学部	井上和興	地域医療体験実習（医学科4年生） 臨床実習1：日野病院・大山診療所（医学科5年生）	医療人類学のレンズを通して医療とコミュニティを行き来する視点を育む地域医療学	地域医療体験実習（対象：医学生4年生 必修 9月～11月）は、鳥取県全域/島根県東部の医療機関で地域医療を体験する実習である。臨床実習1：日野病院/大山診療所（対象：医学科5年生 必修 通年 1グループ2～3人 1クール1週間）は、日野町/大山町にある医療機関で臨床実習を行う。医療人類学の研究手法の「参与観察」の視点を地域医療体験実習で育み、育まれた「参与観察」の視点を持って、臨床実習を行い、診療室とコミュニティを行き来しながら、地域の課題（問い）を発見し、その解決につながる方法を見つけることができる人材育成を行うことを目指す。地域医療現場では、患者の未分化な問題点を見つけ、解決することが求められるため、「参与観察」の視点を持つことで本質的な課題を見つけ出すトレーニングを行うことができる。
3	医学部	尾崎米厚	医学科3年 研究室配属	島根県の中山間地における地域医療実習	限界集落を有する中山間地域で実現可能な地域包括ケアの在り方を明らかにする問題解決学習である。地域医療、へき地医療、浜田市弥栄町の実態に関する文献検索、事前学習を通して、山陰の中山間地域における地域医療に関する調査研究課題を学生各自が持てるように準備する。現地フィールド調査ツアーでは、中山間地に宿泊し、地域医療の現場を視察、体験する中で、地域医療スタッフ、保健医療福祉関係者、患者・地域住民への観察調査、インタビュー調査等を行い、調査研究テーマに関する知見を収集し、集計分析する。結果の解釈については、グループディスカッション、関係者、教員との協議を通して考察を深める。調査結果は現地関係者へ還元する。島根県地域枠に限らず地域医療に関心のある幅広い学生を募集する。
4	医学部	尾崎米厚	医学科4年 社会医学チュートリアル実習	米子市における生活習慣病管理およびフレイル予防に関する地域健康教室	学外の地域の現場で学ぶ、社会医学チュートリアル実習の一環で、米子市における生活習慣病の管理向上とフレイル予防を目指して、生活習慣改善とフレイル予防についての地域健康教室を実施する。学内で事前学習し、血圧と血糖測定の演習をし、学生手作りの教育媒体による健康教室の準備をする。米子市の住民からの希望のあった集会所に米子市スタッフと学生が出向き、健康教室、フレイル予防の健康教室、血圧・血糖測定、健康相談を実施する。健康教室時とったアンケートを集計分析し、米子市スタッフへ還元する。今回はフレイル予防の運動指導も内容に加える。実習の最後には、学内の発表会を行い、実習成果を学生同士で共有する。
5	医学部	桑原祐樹	社会医学チュートリアル	小児期からの生活習慣病対策～睡眠、メディアを中心に～	松江市東出雲町で実施されている小児期からの生活習慣病対策に参加し、1. 児童生徒の健康状態、生活実態を総合的に把握する力。2. 小児の生活習慣に関連した健康問題を学習・抽出し、その要因や解決方法を考察する力。3. 抽出した問題点について、保健教育を通して健康に関する意識づけを促すように対象者に働きかける力、を習得する。グループ内での学習会、現地踏査、学校関係各者へのインタビュー調査、既存の資料や学校でのアンケートの収集と分析、保健教室の実施（テーマ例：生活習慣の乱れと睡眠やメディアの関わり）について実習期間を通じて行い、最後に実習のまとめと発表を行う。
6	工学部	三浦政司	起業とプロトタイピング、ものづくり実践プロジェクト（社会システム土木系、電気電子情報系）	地域課題を題材とした実践型ものづくり教育	地域の企業や行政機関との協力のもと、実践的なものづくりを伴うPBL型の授業である「起業とプロトタイピング」および「ものづくり実践プロジェクト」を実施する。起業とプロトタイピングでは、ニーズや価値観が多様化した現代社会において価値あるモノゴトを創造して起業を成すために重要なプロセスである仮説検証やプロトタイピングについて、基礎講座・起業家講演・プロトタイピングの実践などを通して学ぶ。ものづくり実践プロジェクトでは、協力企業が提示する問題や課題に対して受講生グループが主体となつてその解決に挑戦し、新製品やソリューションの設計・試作・評価などの実践的な活動に取り組む。

No.	部局名	代表者氏名	授業名称	サブタイトル	事業概要
7	工学部	三浦政司	実践プロジェクトⅠ、実践プロジェクトⅡ、ものづくり実践プロジェクト（化学バイオ系）	地域課題を題材とした実践型ものづくり教育	地域企業との連携により、製品開発を伴うPBL型の授業である「実践プロジェクトⅠ・Ⅱ」および「ものづくり実践プロジェクト」を実施する。これらの授業では、協力企業が提示する問題や課題に対して受講生グループが主体となってその解決に挑戦し、新製品やソリューションの設計・試作・評価などの実践的な活動に取り組む。今年度の授業では、鳥取県が主催するとっとりIoT推進ラボの参画企業らとの連携のもと、IoTやAIなどの先端ICT技術を用いた製品開発などをテーマとして扱う予定である。
8	工学部	長曽我部まどか	地方創生政策体験学習	—	地方創生事業についてアクティブラーニング形式で「行政レビュー」を行う。まず、地方創生の背景や事業仕分け、評価方法について担当教員が講義を行い、自治体職員がそれぞれの地方創生事業について説明を行う。次に、学生はチームに分かれ、実際に自治体の現場に入り、自治体職員との議論や事業関係者へのヒアリングを踏まえ、事業に対する情報を収集、分析・評価（Check）する。その後、実際に現場で学んだ事業について、模擬事業仕分けを行い、（A）行政の立場からの説明（説明者）、（B）説明内容に対する指摘（評価者）をチームが交互に行う。模擬事業仕分けの現場には自治体職員にも参加し、現場視点での指摘も得る。模擬事業仕分けの結果も踏まえ、最終的に自治体に若者視点の提案（Action）を行う。
9	工学部	長曽我部まどか	システム計画学特論	高大連携による地域着地型観光ツアーの開発	地域資源を対象とした観光ツアーを企画・運営するというプロジェクトを通じて、地域の高校生と鳥大生が学びあう場をつくる。今年度はLet's Go 北栄ツアー2020の支援と併せて、本取り組みを大山町の御来屋地区に適用するための方法を提案する。2018年より本学持続性社会創生科学研究科の学生が参加し、高校生に助言指導をしながら協働でツアーを実施している。本講義は（1）自治体の協働のまちづくりを関係者から学び、（2）実践を通じて課題を発見し、（3）新たな関係人口を生み出すこと、などに貢献している。
10	農学部	菅森義晃	生命環境農学演習Ⅰ・Ⅱ	地球科学で地域課題を解決し、持続可能な発展を考える	ジオパークではその地球科学的な資源と地理的な制約を活かした活動が展開されている。特に、地球科学的な事象の見せ方は教育だけでなく観光資源として成立している。そこで、本演習（ゼミ）では、隠岐ジオパークと三島村・鬼界カルデラジオパーク、そして地元である山陰海岸ジオパークで地球科学的な事象の理解と活用方法の取得を目的に課題解決型学習を用いて実施する。教員が学生の専門性を高め、その専門性を活かした商業利用についてジオパーク推進協議会や地元のガイド等（インタープリターを含む）と協力し、実践力を養う。学生は実習の成果を「みんなでおしゃべり3」にて発表し、学術・行政・民間で議論を行う中で、ジオパークや地球科学的資源を用いた地域の持続可能な発展方法を模索することになる。
11	農学部	松村一善	食マネジメントⅠ・Ⅱ、食マネジメント演習ほか関連科目群	地域連携による6次産業化支援人材育成プログラム	本プログラムは講義と演習で構成されており、育成プログラムを構成する全科目の単位（16単位）を修得することをプログラムの修了要件としている。講義・演習は食プロレベル1からレベル3の資格認定で求められる内容を網羅しており、本プログラムを修了した者は、食の6次産業化プロデューサー レベル3へのレベル認定申請が可能となる。
12	農学部	日置佳之	地域連携による里地里山基礎教育実習プログラム	現場体験先行型で地域課題を考える	山陰地域の里地里山における自然環境の保全と活用、中山間地域における農林業の現状認識を、現地で見分しながら深めることを目的とする授業。鳥取砂丘などの山陰海岸ジオパーク、砂丘地農業地、岡山県蒜山高原の森林や草原などを訪ね、現地の方に話を伺う。都市部出身学生が多いため、この実習を通して地域の課題をまず身をもって認識することが、里地里山の問題に取り組む人材を養成する第一歩である。少子高齢化が全国の中でも最も進んでいるこの地域において、何が課題でどのような解決策を模索すべきなのかを学生が考えることを促し、それが4年次での卒業研究などにつながることを目指している。